

受付番号

留学・研究計画書

氏名 竹村和朗	留学機関名 カイロ・アメリカン大学付属 砂漠開発研究所 Desert Development Center (The American University in Cairo)
留学先国名 エジプト・アラブ共和国	留学期間 西暦 2009 年 9 月 ~ 2011 年 8 月
研究テーマ その開発はだれのもの？ —現代エジプトの砂漠開発の政治経済および当事者たちの人類学的研究—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>21世紀初頭現在、生産・流通の「グローバル化」や、新市場主義にもとづく「小さな政府」が推進される中、国家に求められる役割は、生産や福祉の主要な担い手から、異なるアクター間の調整役（「やさしい権力」）へと大きく変化しつつある（恒川 1997）。一方、こうした変化の国際的／国内的圧力の中、かつて開発主義や社会主義を採用した多くの「途上国」は、膨れ上がった公的部門と成長半ばの民間部門を抱えながら、国家の役割の現実的な着地点を模索している最中である（東京大学社会科学研究所編 1998）。</p> <p>現代エジプトはそのような転換期にある「途上国」の一つである（伊能 2001）。エジプト政府は 1950～60 年代には開発を追及する社会主義的体制をとったが、1991 年以降、IMF 主導の「構造調整プログラム」を受け入れ、補助金の段階的廃止や政府機能の民営化を進めてきた。しかし国家公務員数や補助金の削減は進んでいない。反対に、スエズ運河通行料や天然資源など外生的収入が国庫収入を占めるようになると、それを配分する国家の権力が強まり、民間部門の発展の阻害や、民主化プロセスの停滞などの結果を招いたともいわれている（Glasser 2001）。先ごろ（2008 年 3 月）起きた政府補助金付き低価格パンの不足による暴動事件一つをとってみても、人びとが国家に期待するものと、現状における国家の実態の間にずれが生じていることがわかる。</p> <p>人びとと国家はどのような関係にあるのか。そして国家の役割とは何か。こうした問いを改めて考えるために、申請者はエジプトの砂漠開発を事例として取り上げる。砂漠開発とは、ナイル川流域に集中する人口と生産を分散させるために、流域外の砂漠地を開発する現象を指す。歴史的には、灌漑施設の拡大によって砂漠地を農地化する「砂漠開拓」が先鞭を付けたが、現在では開拓地を用いた都市開発や工業開発、観光開発までを幅広く含んでいる。砂漠開発を見ることは、中央政府による地方国土の改造と産業発展を目指した国家的な開発プロジェクトを見ることでもある。ここには、国家の役割について考察するための豊富な材料—国内のジャーナリズムや政治家による議論、そして国外の援助機関や専門家による議論など—がある。</p> <p>一方、国家と人びとの関わりを考察するためには、上記のような「上からの」議論と並行して、「下からの」視点や評価を見ていく必要がある。実際に、どのような人びとが、どのような展望をもって開発計画に関わっているのか。そして彼ら彼女らは、国家や開発の役割についてどのような考えを抱いているのか。こうした当事者たちの「声」を、人類学的なフィールドワークによって掬い上げていく。これら上下両方の視点から、砂漠開発の全体像を提示するつもりである。</p> <p>近年、先進諸国では開発や援助の正当性に疑いの目が向けられているが、他方で、大規模な開発・援助は止むことがない。今こそ、国家と人びとという両者を見すえながら、「その開発は誰のものか」と問い直し、その意義を再検討していく必要があるだろう。</p>	

成果報告書

記入日 2012年 4月 19日

氏名	竹村 和朗	留学先国名	エジプト・アラブ共和国	所属機関	カイロ・アメリカン大学附属砂漠開発研究所
研究テーマ：その開発はだれのもの？ －現代エジプトの砂漠開発の政治経済および当事者たちの人類学的研究－					
留学期間：2009年9月～2011年8月（その後半年間、私費にて滞在を延長し、2012年4月初めに帰国）					
<p>私は、東京大学大学院博士課程における研究テーマ「現代エジプトの沙漠開発の政治経済及びその社会・文化的諸相」に関わる現地調査を行うため、松下国際スカラシップ（現・松下幸之助国際スカラシップ）による2年間の留学助成を得て、2009年9月にエジプトへ向かった。当初は2011年8月に帰国する予定だったが、留学中の2011年1月末、後に「2011年革命」や「1月25日革命」と呼ばれることになる、民衆による大規模な異義申し立て行動（民衆デモ）が突如起きた。2月11日にはその要求が実現して、ムバーラク大統領の退任し、「革命後の体制変動」の段階に入ってしまった。これら一連の出来事により、調査日程に大幅な変更と遅れが生じたため、また革命後の政治・社会的変化を少しでも長く観察するために、帰国を半年遅らせることとした（2011年6月に留学計画変更願による承認済み）。そして2012年4月初めに留学を終え、帰国した。</p> <p>以下では、2年半にわたる留學生活の概括しながら、留學・調査の成果について述べていきたい。</p> <p>2009年9月にエジプトに到着した後、まずは受け入れ先となるカイロ・アメリカン大学（The American University in Cairo）に赴き、当初の予定どおり「無給研究員」の資格を得る事務手続きを行った。これにより、エジプト国内における大学関係者としての身分と学生ビザを得ることができた。これは、後に国内移動を頻繁にするようになると本人の「身元」を示すものとして、大変重要になる。</p> <p>その後、カイロ滞在のためのアパート探しをはじめた（カイロのアパート事情については、『大志（松下国際スカラシップニュース No.10）』に寄稿した）。カイロに滞在するのは、研究テーマである沙漠開発の政策論議や開発計画の詳細を知るため、現地で出版されるアラビア語の文献資料（新聞や雑誌、専門誌や研究書）を収集するためであり、またその後続く現地調査（調査地に住み込んで、参与観察にもとづき社会・文化的事情を深く理解する人類学的なフィールドワーク）の際に必須となる会話能力を高める学習をするためであった。</p> <p>前者の文献資料は主に「現代標準アラビア語」で書かれているため、従来学習してきた事柄を応用することで対応できるが、後者の現地調査で必要となるのは、一般のエジプト人が会話で用いる「エジプト口語アラビア語」である。これは現地調査において最も重要なツールであり、なおかつ日本ではなかなか学ぶことができないものなので、まずはこれを重点的に学ぶことにした。</p>					

口語の学習では、外国人に対するアラビア語教授に定評があるエジプト人家庭教師による個人指導を週4~5日のペースで受け、発音の矯正から口語独特の規則や慣用表現、その文化的背景を学んだ。これと並行して、現地発行のアラビア語新聞を日々数紙読むこととし、新聞紙上でとりあげられる政治・社会問題をエジプト人の友人らと話し合った。これによりメディアで用いられる政治用語を体感的に理解することができ、またさまざまな問題に対するエジプト人への意見や反応の違いを感じることができた。こうした体験知は、今後進める沙漠開発現象の政治言説分析に必ずや役立つはずである。(後に、新聞各紙の一面記事を分析したエッセイを、朝日新聞社がインターネット上で運営する『Asahi 中東マガジン』に寄稿した。「エジプトのアラビア語紙の一面比較 「内閣府」事件の報道から」2012年1月9日掲載。及び、「「革命一周年」を読む エジプト国内アラビア語紙の一面比較から」2012年2月6日掲載。)

また、口語アラビア語の学習を続けるなかで、「諺」に強く興味を抱くようになり、これを集中的に学び、論文にまとめた。(「エジプト口語アラビア語の諺：異文化を見る窓として」『アジア・アフリカ言語文化研究』82号、2011年、145-217頁。同内容については、2011年5月に、カイロ(日本学術振興会カイロ研究・連絡センター定期懇話会)と日本(日本中東学会第27回年次大会)の両方で口頭発表を行った。)

2010年6月頃からフィールドワークを行う地域を選定するため、これまで沙漠開発事業が行われてきた諸地域を訪れた。具体的には、所属するカイロ・アメリカン大学付属沙漠開発研究所(Desert Development Center)の実験農場があるナイル・デルタ西部のベヘイラ県バドル郡、西部沙漠のオアシス集落(特にダフラ・オアシス)、上エジプト農村部やアスワン市、そして当初から調査地候補に挙げていたトシュカ開発計画地域(ナセル湖西岸に位置する。エジプト最南端の都市、アスワン市から南西に約350キロ)などであった。

以前修士課程で調査を行ったバドル郡のカイロ・アメリカン大実験農場への訪問では、村や知人友人らの変化を見て取り、長期的な社会調査の必要性を改めて感じた。ダフラ・オアシスでは社会開発組合の活動に触れ、エジプト社会における「組合」という協同の形への興味が新たに生まれた。トシュカ地域では、同地で開墾耕作に従事する大企業の農場を訪れ、その運営実態を観察し、そこに勤める農業技術者や労働者らの話を聞き、その生活の様子を窺い知ることができた。(この経験は後に執筆した鈴木恵美編『現代エジプトを知るための60章』(明石書店、2012年夏刊行予定)の一章「トシュカ計画：沙漠を切り拓く「21世紀の夢」のその先」に生かされた。同書にはこのほか三章分、生活経験をもとにした「商店、街、スーク、モール：現代エジプトの買い物事情」、口語への興味から「ヌクタ：笑いはエジプト人の嗜み」、沙漠開発研究の一環としての「夢か幻か：現代カイロの沙漠郊外開発」を執筆した。)

しかし同時に、トシュカ地域への訪問から、国境に近い僻地である同地での長期滞在を実現するためには、個人による住み込みでは不可能で、組織的な準備が必要であることが判明した。そのため、所属する沙漠開発研究所を通じて、トシュカ地域に実験農場を持つエジプト国立農業調査研究所などに連絡を取り、農場における滞在許可の可能性を打診した。その返答を待つ間、2010年10月頃からバドル郡における再調査、とりわけ今まで詳細が知られていなかった同地の農業協同組合や企業農場が果たした社会的役割や、社会開発組合を通じた社会連帯と組織化の実態を調査することにした。同地にあるカイロ・アメリカン大学の農場の宿泊施設に泊まりこみながら、近隣の農業協同組合やバドル郡の関係省庁を訪問したり、同地で盛んに行われている野菜や果樹の苗木温室栽培会社の密着取材をしたりしていた。

2011年1月、私がこうしてナイル・デルタの「田舎」において現地調査を行っている間に、カイロやアレキサンドリアなどの大都市では、ムバーラク大統領を頂点とする政権に対して（特に次男ガマル氏への大統領職世襲の問題に対して）異議申し立ての大きなうねりが起こりつつあった。一般にこの「革命」のはじまりとされる1月25日「警察の日」にはそれほど情報が伝わってこなかったが、最初期の最大のデモが起きた1月28日「怒りの金曜日」には、カイロやスエズ運河地帯の都市などでデモ群集と警察の間で大規模な衝突があり、警察が一時撤退するほどであったことが伝わり、「田舎」においてもついに事の深刻さが感じられるようになった。

そこで急遽、翌29日に私はカイロに戻り、事の成り行きを現場で目撃することにした。その後、2月初めに治安事情が急速に悪化し、特に外国人に対する陰謀説の流布による排外意識が一部で目立つようになると、カイロに滞在していた他の留学生らとともに一旦国外に脱出し、日本に一時帰国することにした。その頃はまだ先行きがまったく見えなかったが、2月11日、大方の予想よりはるかに早くスムーズにムバーラク大統領が退任したため、私はすぐにエジプトに戻り、「革命後」の政治・社会状況に関する情報収集、エジプト人の友人らの「革命参加経験」の聞き取りを行った（その成果の一つが、『Asahi 中東マガジン』に寄稿した「エジプトのある村で起きた「革命的な」出来事」2011年6月10日掲載）。

その後、3月19日の憲法改正に関わる国民投票などをへて、次第に「革命後」の方向性が定まってく、あるいは錯綜しながらも進んでいく様子を目の当たりにしながら、「革命」のなかで用いられた口語アラビア語によるスローガンや詩、歌の収集と分析を行った。（2012年2月に東京大学で開かれた国際ワークショップ「エジプト革命（2011年）における現代アラビア語の言語社会学的分析」において、「「シュハダー」とは誰か？：2011年2月に発表された「革命の殉教者」に関わる五曲の大衆歌謡曲を手がかりに」として発表した。）

このように2011年1月末から「革命」という誰もが予想していなかった出来事が発生し、その対応に追われたこと、同時期には国内の治安状況が不透明であり、以前のような地方での現地調査が難しくなったことから、予定していたフィールドワークを一時中断せざるを得なかった。この遅れを取り戻すべく半年間の滞在延長を決めたが、トシュカ計画は計画をめぐる修正や変動の真っ只中にあり、長期的な調査ができる可能性が極めて低くなったことから、フィールドワークはそれまで継続的に調査しており、現地の人々との一定の信頼関係が築かれていたバドル郡において行うこととした。

同時に、バドル郡における社会調査をより包括的なものとするため、調査対象を従来の「村」から同地域の中心地である「町」に移した。この関心の変化は、直接的には「村」の住民が日常的に、買い物や仕事のため、あるいは医療や行政、教育サービスを受けるために「町」へ行き来していたという現象的側面による。そもそもバドル郡は、1950年代に「タハリール特別地区」として作り出された沙漠開発地域であり、バドルの町はその中心地として作られたため、ここは同地域の歴史を語る上で不可欠の要素なのである。また農村社会の観点からも、地方の「町」を包含する理論的意義は大きい。

そこで2011年6月から、カイロ・アメリカン大の実験農場に宿泊しながら、バドルの町におけるアパート探しをはじめた。人口2万人強とさほど大きな町ではないため、賃貸アパート自体がそれほど多くなく、当初は難航したが、翌7月には物件を見つけ入居することができた。アパートは、大家の一家が住む家の二階部分である。この家は約100平方メートルの敷地に建てられ、一つの階にそれぞれ独立したアパートがある。基本的な家具や家電製品が付属している「家具付きアパート」である。

大家の一家の場合、もとは1階建ての家だったが、エジプトでよく行われるように、少しずつ上の階を建て増ししていき、私が入居した時点で完成されたアパートが三階分あり、4階は半分が屋上で、半分が屋根がかけられただけの状態であった。3階に大家夫妻と未婚の次男が住み、1階に長男夫婦が住み、2階を賃貸ししていた。(後に4階部は少しずつ内装が整えられ、私が帰国する直前の2012年3月末に、次男が結婚し、4階に入居した。) 大家一家とは、はじめはただの大家と店子の関係であったが、次第に信頼関係を築くようになり、食事や調査の相談など頻繁に出入りをするようになった。(ここで食べさせてもらった食事について、『Asahi 中東マガジン』に二度寄稿した。「寒くなると食べたくなる キャベツのマハシー」2011年12月19日掲載、「赤白黒 エジプトの三種のマカロナ」2012年3月26日掲載。) 大家は、不動産や建築の法制度や実践をよく知り、またバドルの町に生まれ育った「土地っ子」として、町の歴史や社会関係に詳しいため、調査の良き相談相手となってくれた。これは予想外の幸運であったと言える。

こうして約8ヶ月の間、私は基本的にバドルの町に住みながら、おもに町の住宅発展の歴史を調査して回った。そのなかで町の発展の大きな転換点の一つに、1970年代末から同地域で進められた「土地所有権の移譲／確定」があるように思われてきた。この問題に関わる土地売買の慣行や契約書の文言について詳しく調べ、カイロの法律書専門店に関係法令集を数多く収集した。こうした法制度と地域社会(特に沙漠開発のような開発計画が先立ってあったような地域)の発展の関係性が、今後博士論文のなかで主な論点となっていくだろう。

留学・調査計画書の段階では、1997年にはじめられた大規模沙漠開発計画「トシュカ計画」を取り上げ、これを言説と実践の両面から眺めることで、沙漠開発現象を全体的に理解する材料とすることが掲げられた。しかし上述したように、「2011年1月25日革命」はエジプトの政治・社会的な状況を大きく変えた。たとえば、ムバーラク政権の崩壊とともに、同政権がはじめたトシュカを論じる意義は、「革命前」の政治を問うことになった。また強力な警察権力に支えられていた「革命前」の安定した治安情況は、「革命後」の警察の威信の低下や社会不安によって大きく揺れ動いた。結果的に、トシュカに関わる当事者たちの「声」を集めるという当初の計画は実質的に不可能になったが、その代わりにベヘイラ県バドル郡を対象にすることで、同地を作り出した1952年にはじめられた大規模沙漠開発計画「タハリール地区計画」を、より長期的なスパンで、より広範な視野をもって調査することができた。この変更に関する現時点での評価を述べて、本報告の締めくくりとしたい。

第一に、トシュカ計画の政策論議、知識人や専門家による批判的見解に関わる資料収集は、「革命前」においてほぼ達成することができた。さらにここに「革命後」に噴出した旧政権の「腐敗問題」、特に農地の宅地化や沙漠地の不当に安価な取引に関わるもので「不法な利益取得」と呼ばれる問題群を絡めることで、トシュカを生み出した政治や論理、沙漠開発という国家事業とは何だったのかを、より根本的に問うことができるだろう。

第二に、調査対象地の変更は、トシュカという「開発計画」そのものではなく、タハリール地区というかつての開発計画によって生み出され、今では成熟した「地域社会」を取り上げることが意味する。これは、開発の「今」を問う点では不満が残るが、開発の「その後」を問う点では興味深い論点を含む。

沙漠開発には移住が伴うため、「新しい社会」はつねに「寄せ集めの社会」である。それがどのような契機や経験をへて、社会的な連帯意識を生み出していくのか（あるいは、いかないのか）。バドル郡のような「古い新しい社会」は、こうした考察のための格好の材料となるだろう。

第三に、バドル郡は1950年代からの歴史を有しているため、その間のさまざまな政治イデオロギーや政策方針の変化の影響を受けてきた。そうした変化の一つに土地所有権の法制度の問題が関わっている。特にバドル郡は「沙漠地」であるため、旧来の「農地」を想定した土地制度の行き届かないところに発展してきた。同地での1970年代以降の土地所有権の確定とは、従来グレーゾーンに置かれてきた沙漠地を、「民営化」の名のもとに新たに区切り直し、個人および個人が集合した組合や企業が合法的にこれを得る環境を整えることであった。それは同時に、より富める個人により大きくその機会を開いたと言えるが、そのことがバドルの町にヒトとカネを集め、社会発展の速度を速めてきたようでもある。こうした相関関係を理解することは、沙漠開発の理解の根幹に関わるだろう。

第四に、このように開発計画を論じる人類学的研究を出発点としながら、開発計画によって作り出された地域社会を対象を移行することで、理論的な焦点はおのずと変わってくる。問われるべきは、開発計画のような「特例」がどのように社会に影響したのか、だけではなく、開発計画地域が発展し成熟していくなかで、そうした「特例」がどのようにして当該社会のなかに消化され、「普通」の存在に変わっていくのかという過程である。現時点では、おそらくそこには、「特例」に対する「法の支配」の漸進的拡大があり、またそれを免れるために新たな「開発＝特例作り」が行われるという反復構造があるのではないか、という推測がある。

今後は博士論文に向けて、これまでの留學生活で得られた資料やデータを整理し、こうした諸点を軸に議論をまとめていく作業を行っていく。留學に旅立つ前には思いもつかなかった論点が見えたこと自体、私にとっては十分に大変な成果であるが、それらを目に見える「成果」にする作業が重要なのだと思う。まずはその作業に邁進していきたい。

最後に、松下幸之助国際スカラシップの関係者の皆様に、感謝と御礼の気持ちを申し上げたいと思います。留學時期に「革命」が重なったのは、大いなる偶然ですが、現代エジプト研究を志す者としてはこれ以上ない幸運でした。もし留學助成がなかったら、これだけ状況が不透明ななか、わざわざエジプトを訪れて長く滞在することはできなかったと思います。また「革命」の最中でも身の危険がない限り、滞在を支持してくださったこと、「革命後」を見たいという希望を受け入れ、留學期間延長を快諾してくださったことなど、関係者の皆様の懐の深さに助けられ、何とか留學をまっとうできました。特に事務手続きで何度もお世話になった高木様、谷口様には、深く御礼を申し上げます。

本当にどうもありがとうございました。

[資料]



写真 1：バドルの町での住居。二階部分を借りて住んでいた。一階は大家の長男夫婦が、三階には大家夫妻と未婚の次男が住んでいた。後に四階部（屋上）を増築して、次男が結婚・入居した。左手に見える鉄扉が入口で、中に階段が備えられている。



写真 2：屋上からの風景。右手下に見える三角屋根の平屋は政府によって建てられた最初期の建物。左手にある二階建ての建物は初期のもので、外壁まできれいに整えられている。奥に見える赤煉瓦むき出しの建物は最近のもので、外装までなかなか手が行き届かない。



写真 3：大家との食事風景。日常的な食事風景だが、週に二度ある豪華な食事の回でもある。マハシーと呼ばれる味付けご飯を色々な野菜に詰めた料理で、ズッキーニのマハシーと、葡萄の葉に巻かれたマハシーが並ぶ。緑色の汁物はモロヘイヤ・スープ。



写真 4：大家次男の結婚式。2012年3月末に執り行われた。結婚式は自宅前の路地を利用して行われ、そこに一日がかりで椅子や照明、音響システムやスピーカー、花嫁花婿が座る演壇が作られた。結婚式ではきれいに着飾り、音楽によって踊りを踊って楽しむ。